「子平推命とは何か」小山眞樹代

日本に於ける東洋の[命術]で、一番多くの人に知られているものは
「九星気学」と「四柱推命」ですが、子平は、その[四柱推命の原点]
と言えば、解りやすいかと思います。

昔から、インドでは結婚する時、お互いの「ホロスコープ」を交換する人が多い、といわれますが、中国や台湾なども、相手の「八字」（又は、四柱）は何ですか？　と調べたりする、と言われます（**八字**／人が生まれた時点の年、月、日、時の暦の記号、天干、地支、四組の八文字を言う）。

一人の人間が、生まれた瞬間に、地球上の諸々の「理気」を受ける訳ですが、その時の「天上の気」「地上の気」を分析し、ある一定の法則を持って生成されたデーター、即ち暦から得た情報を「八字」に組み立て、本人の原点、これを【元命】とし、人生のスタート時点のカルテとして、これから成長してその身に受ける、年々歳々の地球上の気の変化により、その人の運勢のカルテが良くなるのか、悪くなるのか、治療法が有るのか、手術が必要なのか、それとも全く、健康、長寿、順風満帆なのか…。

子平は、この八字の変遷、変化から全てを読み取って行きます。そのため、この暦の記号に隠されている天地の理気（すなわち、陰陽五行に区分された、十干、十二支）を熟知しないと判断が出来ませんが、解れば簡単、なるほど、なるほど、とパズルを解いて行くような病み付きになるような面白さとなります。

尚、「子平推命」と「四柱推命」の違いは何か？　それは中国における歴史的背景が有ります。

「四柱」は早くから中国の一般社会に広まり、時代とともに占術者たちが自己のアイデア、アレンジを加え「神殺」などの魅力ある用語を用い、また「八字」を倍の「十六字」に広げ、華やかに仕上げたものであり、「子平」は科挙の試験など、人材発掘や国家側の要人たちの為の命術として、一般庶民の目に触れさせない文献の中の運命学であったため、またその文言に面白い要素もなかったため、難しいと敬遠され、近代になっても広く世の中に受け入れられないものになりました。

先人は、早くから巷に流布された「四柱推命」を受け取り、後人は、紫禁城の奥からやっと最後に出てきた「子平推命」を受け取る事になった、とも言えるでしょう。

ただ子平は、原点をアレンジしていない分（流派によつて、「蔵干」が違わない）、判断の基本に変化が無く的中率が高いので、最近は学ぶ方が多くなっています。

四柱推命も子平推命も両方出来れば、鬼に金棒でしょう。

「子平推命の歴史的背景」

「子平推命」は、中国宋代初期の星命に精通した学者「徐子平」により、子平の原形の書『禄命法』から始まり、宋代末期の「徐大昇」によってまとめられた、とされます。初め両者は同一人物と思われましたが、別人であり、元祖の徐子平の名前から由来するといわれるようになりました。また、根本的には「子平」の「子」とは、干支暦に使われている「六十干支」の第一番目の干支「甲子」の「子」であり、それが代表する六十干支の総ての干支が、平均してバランスを保つ命式を持っているかを問う意味があります。さらに、もう一つ「子」は北の水局の「水」を示し、「平」は平衡、すなわち水が平らであるが如く、その人間の命式で示す要因のバランスが取れていることを吉とする命術であります。

子平推命が、完全な形で確立したのは、宋代末期、徐大昇の『子平三命通變三巻』からといわれています。

●上巻／註定真論喜忌論継善論
●中巻／歌訣（百章歌各格局歌十二長生詩訣）
●下巻／内外十八格局

この『子平三命通變』からその後『淵源子平』『淵海子平』（現在の四柱推命は、江戸時代仙台藩の儒学者・桜田虎門がこれを解読し、『推命書』として流布したのが始まりとなる）などが新たに増版され、名前を変えられたことで徐子平の意図した子平推命ではない、「ア・ラ・カルト推命」（フルコースで学ばず、一品料理的に好みの部分だけ手軽に習得出来る方法が一般受けした）が広まりました。人の命運の情報を正しく引き出せない、統一性や脈絡を欠いた諸々の寄せ集めのものに変化した推命学が、流布されてしまったのです。

しかし、その後子平は、『子平三命通變』の中巻「百章歌」「各格局歌」をベースにした、明朝の宰相である劉伯温（1311～1374年）によって、子平のバイブルといわれる『滴天髄』が著され、解釈も古典から現代版へと変化、進化し、科挙の試験に合格し君子になることを重視した「成敗」（成功と失敗）の格局論より、社会的立場を問わず、個人の幸福感を重視した順悖による「禍福」（災いと幸せ）の天干相互の干関係を見る（六十干支のバランスを大切にする本来の意味）論理を見直す風潮の格局論も出、やがて「透派」という門派の初代・梅素香の『子平洩天機』（滴天髄、洩天機共に字の如く天の機密の骨髄をポタポタと地上の人間に洩らす、天地の法則を人間に知らせる、の意味）や同じく同門の王文澤の『透派子平大法心得』などにつながり、発展してきました。特に王文澤は、子平命造の五行を数値化し、その点数計算により明確な格局の判定が可能となり、『滴天髄』の理論を正しく近代に導いた、徐大昇、劉伯温につぐ偉大なる功労者であるといえるでしょう。

そして現在、私如きが学べるようになったのも、中国の文化大革命によって明代の刊本『新鍥誠意伯秘授 玄 徹通旨滴天髄二巻』（劉基題、長庚舘刊、台湾國家圖書館）の原書が台湾に流出したためであり、さもなくば未だ中国大陸の奥（紫禁城から峨眉山へ）に眠り続けていたであろう宝刀であったわけです（劉基＝劉伯温）。

くどくどと長くなりましたが、「子平推命」とは天の叡智、法則を知り、それによって個々の身を修め、国家を平安に治める「修身斉家治国平天下」が目的の儒教的な哲学的運命学であり、「君子知命」、すなわち君子は己の命を知り、自己の出処進退を覚悟し、慌てずに心の用意や対処をすることを教養とした先人の教えです。

「子平推命の手順とポイント」

さて、子平は本来簡単、十干、十二支を判断すれば解りますと申し上げましたが（確かに四柱の天干、地支の相互関係を行運を交えて読むだけである）、その簡単方程式を解くために実は、多少複雑な手順があります。この手順の煩雑さが、子平推命の発展を遅らせたともいえるでしょう。

今これらを御理解頂けるようにお話するには、シンポジュウム講演、という時間内では到底無理でありますので、ここではその手順とポイントを簡略にご説明することで、お許し頂く事に致します。

(1)「四柱」を組み立てる…通常の暦から、年、月、日、時は配当出来ます

（生時が解れば、時差も加えます）生まれた時間が不明の場合は三柱迄作り、不足面は大運と歳運の干支で充当したものを参考にします。特に、60代後半~70代80代にめぐる大運が良いか、悪いか、に注目します、又、命式の月令（生月の四季の五行のエネルギー・・月支蔵干）と同じ五行の干が廻る時期は、何らかの変化や、発展と見る手掛かりとなります。ただし、蔵干が凶物（凶物深蔵と言う）の場合は危険な時期となります。

(2)「八字」の地支（十二支・根と言う）に含まれる五行の成分を配当する

例：平成23年辛卯年――地支、卯は（木）となる。
同年10月は、戊戌月――地支、戌は（土金火）となる。

子平推命においては、四柱の「天干」の相互関係がよいことを大切にしますが、次に重要なのは、地支の配置が天干と上手くつながっているか、ということになります。地支がその働きを失っていれば、人生や物事に永続性がなく、また、具体的な裏づけや効果を得られない傾向になるのです。

そのように大事な地支の十二支ですから、各支がどのような力を持つのか、五行は何に当るのかを覚えてください。

また、十二支には季節によってエネルギーの強弱があります。十二支に含まれる「力」のパーセンテージも覚えましょう。

●十二支の成分表

十二支	五行	根として含まれる五行	季節の強弱
子　ね	水行	水　（100%）	仲支（ちゅうし）No.1
丑　うし	冬の土用	土水金（33%）各五行につき	季支（きし）　No.3
寅　とら	木行	木火　（50%）各五行につき	孟支（もうし）　No.2
卯　う	木行	木　（100%）	仲支　No.1
辰　たつ	春の土用	土木水（33%）各五行につき	季支　No.3
巳　み	火行	火金　（50%）各五行につき	孟支　No.2
午　うま	火行	火　（100%）	仲支　No.1
未　ひつじ	夏の土用	土火木（33%）各五行につき	季支　No.3
申　さる	金行	金水　（50%）各五行につき	孟支　No.2
酉　とり	金行	金　（100%）	仲支　No.1
戌　いぬ	秋の土用	土金火（33%）各五行につき	季支　No.3
亥　い	水行	水木　（50%）各五行につき	孟支　No.2

(3)「六親」の配当をする。六親とは何か

◆五行におけるもう一つの表現、六親

六親とは一般的に、父、母、兄、弟、妻、子の総称ですが、これは昔の男性中心の社会の見方で、現代では父母が親として、親、子、兄、弟（姉、妹）、夫、妻が正しいでしょう。いわゆる家族、親族、仲間を示しますが、子平では（この解釈は一般の四柱推命においても同様）組み立てた命式の十干を六親に区分し、それを特別な用語を用いて表現し、その配当された六親とまた、もう一つの象意を含むものとして解釈を加えています。

たとえば、六親の「母親」を「印綬」（正印と偏印の総称）と表現します。母は自分を生じるもの、我の利益となり、保護するもの、の象意をとっています。「印綬」は自己の充実を図る学問や知恵、研究心、貴人、目上の引き立て、先祖運、家柄のよさ、神仏のご加護（宗教）、社会的なバックアップ、名誉、地位の向上、評価、などの意味を持たせています。そして印綬がその命式にバランスよく働いていれば、生まれ育ちのよい、知性教養もあり社会的立場を得られる、人脈豊かなお坊ちゃま、お嬢様と解釈します。

しかし、その印綬が命式にとって悪い働きをしていれば逆の作用を生じますので、自己中心の世間、目上、親に甘える依頼心の強い、悪知恵の発達した、パラサイト的人格と解釈します。従って社会的な立場も得られず、プライドだけが高く、自己の世界に閉じこもる傾向を生じます。

このように六親それぞれに名称があり、各象意の意味がありますので、深く解剖する前に名称だけでも覚えましょう。

注：通常の四柱推命では、六親を通変星ともいいます。また、「正印」を「印綬」と表示します。子平推命では「正財、正官」に対して「正印」といい、「偏財・偏官」に対して「偏印」といいます。「印綬」とは正印と偏印を合わせて「印」そのものの総称となります。
尚、六親は十干関係の「正剋」から求められているもので、単に記号であるため名称それ自体には吉凶はありません。

注：「傷官」だから必ず傷つける作用ではありません。傷つける立場になるか、ならないかというのは、干関係の組み合わせと強弱によって判断します。

注：四柱の中で日柱の干は、自己を示し「日主」といいます。六親の求め方は「日干」からそれぞれ年干月干時干の天干を見て六親を配当していきます。

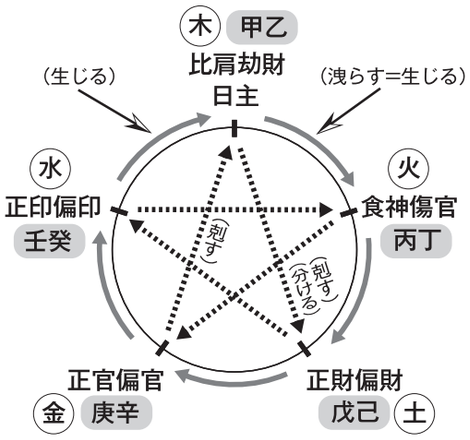
●六親表

癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	日干 ＼ 六親
癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	比肩（ひけん）
壬	癸	庚	辛	戊	己	丙	丁	甲	乙	劫財（ごうざい）
乙	甲	癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	食神（しょくじん）
甲	乙	壬	癸	庚	辛	戊	己	丙	丁	傷官（しょうかん）
丁	丙	乙	甲	癸	壬	辛	庚	己	戊	偏財（へんざい）
丙	丁	甲	乙	壬	癸	庚	辛	戊	己	正財（せいざい）
己	戊	丁	丙	乙	甲	癸	壬	辛	庚	偏官（へんかん）
戊	己	丙	丁	甲	乙	壬	癸	庚	辛	正官（せいかん）
辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	癸	壬	偏印（へんいん）
庚	辛	戊	己	丙	丁	甲	乙	壬	癸	正印（せいいん）

●六親の「生」「剋」図

生じる関係

剋する関係



●図は五行の相生、相剋の図式に六親を配当したもの

「比肩」は、我を示しますので、日主と同じ「干」が比肩となります。日主と同じ五行の陽干か陰干が「劫財」に当ります。これをまとめると次のようになります。

◎日干と同一の五行で干の陰陽が同じ—比肩
◎日干と同一の五行で干の陰陽が異なる—劫財
◎日干に生じられる五行で干の陰陽が同じ—食神
◎日干に生じられる五行で干の陰陽が異なる—傷官
◎日主が剋す五行で干の陰陽が同じ—偏財
◎日主が剋す五行で干の陰陽が異なる—正財
◎日干を剋す五行で干の陰陽が同じ—偏官（七殺）
◎日干を剋す五行で干の陰陽が異なる—正官
◎日干を生じる五行で干の陰陽が同じ—偏印
◎日干を生じる五行で干の陰陽が異なる—正印（印綬）

ちなみに、上記の図は日主が「甲、乙」ですが、日主が「壬、癸」になれば「食、傷」は「甲、乙」になり、「正、偏財」が「丙、丁」になります。右回りに順に移行してゆきます。

（4）組み立てた[命式]の整理をする。

命式の整理とは、「八字」の五行が完全に働いているか？隣合った天干、地支の相互関係の作用によって、その働きを、失っていないかどうか、（子平には、隣同志で相殺したり、倍に増えたり、違う五行に変化したりすることがある）知る為に、並べた「八字」を再度調べ、手を加える事をいいます。

もし、この作業の手を抜くと、この後にする、命式の点数計算、そこから判断する、命式の「格局」が間違えたものになってしまう為、面倒でも細かく見る必要があるのです。即ち「整理」は命式を【数値化】するための準備です。

—手順は次のとおりですー

天干相互に［干合］があるか。
地支相互に［支合］があるか。
地支相互に［支冲］があるか。を調べます。

1 天干の整理

―お互いに干渉し合う十干の組み合わせがあり、それを「干合」という―

「干合」とは十干のある特定の干同士が特殊な相互関係を持ち、作用し合うことをいいます。そして、その組み合わせが条件によって変化し、他の五行に姿を変えることがあります。
（『滴天髄』では、これを「化象」といい、変化した二つの干を一つの五行の塊りと判断しています）
次の『透派子平大法心得』の原文の一文を見てください。

「干合當令必変化　合己加倍合他無」

「干合は令に当れば（変化する五行と命式の月令が同じ五行になること）必ず変化し、己（自己、日主）との干合は倍を加え、他の干合は無となる」といっています。これをまとめると干合は三パターンあり、次のようになります。

Ⓐ変化干合
Ⓑ倍加干合
Ⓒ無作用の干合（干合去ともいう）

Ⓐ変化干合

―元の命式から異なる姿に変わる干合―

命式の四柱のいずれかが干合して、月令が変化する五行と同じ場合は変化します。変化の組み合わせは、下の表のようになります。
（右記の表は変化干合のみの化象であり、条件が揃わなければ、Bの倍加干合かCの無作用の干合になり、使えません）
尚、難しいと思われる変化干合も理論として、頭に入れるとやさしくなります。四季別に考えてください。

●変化干合表

天干の組み合わせ（干合名）	条件	変化	化象（または化神）
甲（こう）―己（き）	月令が土	化土	戊―己
乙（おつ）―庚（こう）	月令が金	化金	辛―庚
丙（へい）―辛（しん）	月令が水	化水	壬―癸
丁（てい）―壬（じん）	月令が木	化木	乙―甲
戊（ぼ）―癸（き）	月令が火	化火	丙―丁

Ⓑ倍加干合

―日干に関わる作用の場合―

日主といわれる自己を示す「日干」が、干合して変化出来ない条件の場合は、干合してきた相手の「干」が、日干に対して二倍の作用を与えます（相手の干が二つ加算されます）。

Ⓒ無作用の干合

―その働きを失う干合―

干合の関係になる組み合わせの場合で、月令を得られない場合は、変化干合出来ずその働きを止め、二つの干の存在は0ゼロとなり、ないものとされ、「干合去」（干合して去ること）といわれる無作用の干合となります。この干合は、日主に関わるときは倍加干合となります。

●例／倍加干合

1968年（昭和43年）
4月11日生まれ

（元の命式）

日	月	年
辛 亥	丙 辰	戊 申
日主	（乙月 木令）	

（干合後の命式）
（倍加干合）
＋丙

日	月	年
辛 亥	丙 辰	戊 申
日主	（乙月 木令）	

注：「丙と辛」は月令が水であれば「壬と癸」に変化しますが、この命式は春生まれで月令が乙木であるため変化出来ず、丙は辛に対して倍の作用を与えます。

●例／無作用の干合

1974年（昭和49年）
5月15日生まれ

（元の命式）

日	月	年
丙 辰	己 巳	甲 寅
日主	（丙月 火令）	

（干合後の命式）
（無作用の干合）

日	月	年
丙 辰	己 巳	甲 寅
日主	（丙月 火令）	

←干合去となる

注：無作用の干合の年干と月干は、何の働きもしないため、命式上には記入されても存在しないものとします。この場合、日干の「丙」だけの（時間があれば、時干を加えて）人となります。尚、地支の辰と寅と巳は、働いていると判断されます（地支は次ページ参照）。この命式で月令が「土」であれば、年・月が化土して「甲」が「戌」、「己」はそのまま「己」になる変化干合として働きます。

尚、「変化干合」の場合は「化象」した「五行の塊」には其々のもつ特徴があります。「命式」が、「化ける」訳ですから、その特性の人物に変身します(独特な魅力や、カリスマ性がある)

近々の具体的な人物で、古典の文言とその解釈を、例題としてご紹介しておきます。

○［丙合辛生、鎮掌威権之職］

―丙と辛が合って生じる時、すなわち「月令」が水で「化水」と変化して「化水格」と成る時、権力、権威をその掌に収める職業に就くことが出来ます―

政治家や国家が主催する行事に関わる役目などを得る、また、裁判官、弁護士、外交官、税務署、警察関係、政治家、高級官僚など国家側の要人となり権威を示せる人物となる、の意味となります

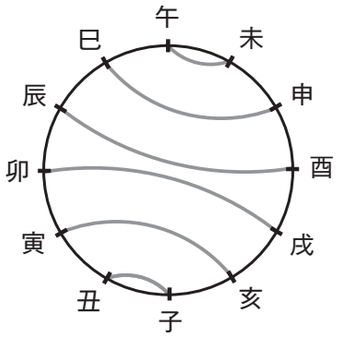
例：「政治家、現内閣の行政刷新大臣、蓮舫さん」
1967年(昭和42年)11月28日、月令壬水、(冬の水生まれ…自分の思う人生を、楽しく、自由に生きるタイプ)

日干「丙申」月干「辛亥」の丙辛が「化水干合」の命式となります。

先の内閣でも、目玉政策「事業仕分け」で居並ぶ国家の要人たちを堂々圧する「威権之職人」ぶりは、まさに古典の生き証人とも言えます。

2 地支の整理

―お互いに干渉し合う十二支の組み合わせがある―



次に地支の働きが完全であるか否かをチェックします。地支には天干の働きに力を与える大切な要素があります。それぞれが組む天干の五行を地支が持っていることが、天干の働きに力を与えることになりますので、隣り合う柱の地支同士が干渉し合い、その働きを止めていないかどうかを調べることが必要となります。

地支には「支合」と「支冲」という二種類の組み合わせがあります。一つの命式の中に、この組み合わせがなければ、四つの柱の地支はとりあえず（大運、歳運で組み合わせの支が出現する場合もあります）完全に働いていることになります。では支合、支冲の原理と組み合わせを見ましょう。次の通りとなります。

●支合表

子	⌒	丑
寅	⌒	亥
卯	⌒	戌
辰	⌒	酉
巳	⌒	申
午	⌒	未

Ⓐ支合

―二つの支が仲良く結合して固まる作用―

組み合わせの条件は、二つがある一定の角度を持つもの同士となります（30度、90度、150度）。

注：総ての九〇度（他も）が結合するわけでなく、むしろ不調和が多い。

命式において年月、月日、日時と隣り同士に支合があれば、その二つの支はお互いに干渉し合って手をつなぎ、天干に対しての働きが失われているものと判断します。それを「合去」といいます。

Ⓑ支冲

―二つの支が反発し合う仲の悪い関係―

組み合わせの条件は、互いに対冲する一定の角度を持つもの同士となります（一八〇度）。

支合と同様、年月、月日、日時にあれば互いに反発し合って干渉し、天干に対する働きを失うと判断され、それを「冲去」といいます。姿はあっても実体がないため、去っていると表現します。従って「去」といわれるものは、命式の数値で計算される点数に加算されません。

●支冲表

子	午
丑	未
寅	申
卯	酉
辰	戌
巳	亥

Ⓒ支合、支冲が同時に重なる特例

―異なる作用の干渉が同時に来ると、逆に干渉を解いてノーマルに働く―

次に、この合冲が四柱において複雑に絡み合って来る場合、いくつかの決め事があります。面倒でも基本をマスターすることによって、的確な判断が楽に出来るようになりますので、例を参考にして覚えてください。次の文章を見てください。

「支合支冲、各失其用、冲遇合則抵消」

「支合、支冲はおのおのその用途を失い、冲が合に遭遇すれば、すなわち逆らって消える」とあります。また、逆も同じで「合」があるところに「冲」があれば、「合を冲で解く」ことになります。そして命式の合と冲に逢った三支は、用途を失わずに有用となります

●例／支合、支冲が同時に重なる特例

1966年（昭和41年）
7月17日生まれ

（例㋖の応用）

日	月	年
丁 丑	乙 未	丙 午
	冲	合

（実際の命式）

日	月	年
丁 丑	乙 未	丙 午
(土・水・金)	(土・火・木)	(火)

三支の根午未丑は、
有用となり「去」
はしないで生きる

(5)「月令」を求める…四柱推命で言う処の月支元命、大事な要因です

一般的には「月令」とは、新月の時を0ゼロとして起算する日数、最も近い朔（太陰暦の一日。北方、月の黄経が太陽の黄経に等しい時の称）を起点として、その時迄の平均太陽日のことをいいますが（月の満ち欠けの度合いを示す）、子平では、その時の季節における五行の配当の区分をいいます（その季に一番強い五行）。命式の天干の五行が、その時の季節の五行と同じであれば「月令を得た命式」といい、または、「当令」（月令に当っているの意）しているとも表現されます。

子平の古典では、月令を得た命式のみが一流である、「欲知貴賤先觀月令及提綱」（人の貴命か、賤命かを知りたくば、まずみよ。月令と提綱〈つながり透干のこと〉）といわれましたが、明代の劉伯温の『滴天髄』の時代になると、月令を得ていなくても、四柱の干関係がある一定の条件を備えていれば充分一流になれる、と判断に柔軟性が出ています。

一方、「蔵干」とは、月令の五行の干のことを示し、五行が「木」であっても蔵干は、「甲」「乙」のどちらか一つになります。「蔵干」は、天干として表面に出ている命式上の「干」に対して、月令として持っている「干」ということになります。

その命式が「月令」として内面に持っている五行が、天干と同じ「干」であれば、より一層、その命式の天干が季節のエネルギー（気）を得て強く活躍することを意味します。

「時干」は、同じ五行の「木」ですが、月令の蔵干が「乙」のため、時干の「甲」が陽干であっても、日主の「乙」のほうが強くなります（具体的には、時柱の目下、部下、子供、兄弟、男性であれば恋人や妻など、近くの人間に頼りながらも、自己の希望や信念を通し、自己確立してゆくタイプとなります）。

ただし、その命式によって、月令が悪い「干」を助ける場合もあり（忌神の天干の月令を得たもの）、悪さが月令を得ることにより、三倍の強さのエネルギーを受けて、その命式の持つ凶兆が拡大することになり、人によっては、月令を得ないほうが吉の場合もあります（悪い月令を内蔵することを「凶物深蔵」という）。

日柱	乙亥
時柱	甲申
日主	水木
劫財	金水

（月令 乙木）

日主が月令を得ている

月令は木行・蔵干は乙

日主乙と蔵干乙が同じ

日の柱の地支の亥は「木」で通根をしている

甲乙は同じ木行の五行なので甲も月令を得ている

たとえば、酒乱に飲み放題の特典を一生与えたような、悪さの火に油を注ぐような状況となります。また、「大運」「歳運」などの運の運びで五年間だけ、また一年間だけの期間限定の凶物もあり（逆の期間限定の一流の才能もある。)、月令の吉凶は、それぞれの命式によって異なります。

この蔵干の算出方法は、紀元前104年頃、前漢の末期に陰陽五行説が出来て、天体観測法も進歩し、星の運行や地球を廻る太陽の周期も正確に研究されて暦が作成されました。その暦は五行が季節に配置されたものを使用し、太陽の黄経360度を十干で割り、四季に「土用」を振り分けたもので「節気蔵干」といい、中国の正当な蔵干論です。

尚、「土用」は、皆様の知っている土用のうなぎの夏だけでなく、春、夏、秋、冬と四季にあります。

陽月の土用は、陽支の土、「戊」、陰月の土用は、陰支の土、「己」を配当しています。

●節気蔵干表

太陽の黄経
360度÷10干＝36度
1干につき36日間を配当する。
土用のみ四季に分割して
戊 18日＋18日＝36日間
己 18日＋18日＝36日間
とした。

節より一三日以降	節より一二日迄	節より六日迄	節入り月支（生月）	暦	四季と五行
甲	甲	甲	寅	2月	春（木）
乙	乙	甲	卯	3月	
戊	乙	乙	辰	4月	
丙	丙	丙	巳	5月	夏（火）
丁	丁	丙	午	6月	
己	丁	丁	未	7月	
庚	庚	庚	申	8月	秋（金）
辛	辛	庚	酉	9月	
戊	辛	辛	戌	10月	
壬	壬	壬	亥	11月	冬（水）
癸	癸	壬	子	12月	
己	癸	癸	丑	1月	

春の土用 → 戊
夏の土用 → 己
秋の土用 → 戊
冬の土用 → 己

(6)「命式」に点数をつける

―命式の五行を数値化することによって、どの柱を生きる目的にすればよいか解る―
（格局を定める前の準備）

次に、いよいよ命式を数値化する作業に入ります。それによって命式のタイプ（格局）が決まります。では点数計算の方法を覚えましょう。尚、計算が苦手な人は、点数が一目で解る数値一覧表を使ってください。

まず次の文章を見てください。八字の強弱を数値化する方法、透派十代の王文澤の著『透派子平大法心得』からの抜粋です。

「五行各設基数為二、当令則三、支合支冲、各失其用、冲遇合則抵消。
干為係数、支為指数、各以命中幾数而計之」

五行の数値は、各々基本数は、根一支に対して「二」（二点）、そして「当令（月令を得ている五行）」しているものは、すなわち「三」（三点）となります、といっています。次の文の支合、支冲は、それぞれその用途を失い、冲に合が逢えば、すなわち消える、という文面は、前の地支の整理で引用しました。

次の文面で計算方法を述べています。天干は係数で計算し（着目する変数に掛かっている数）、地支は指数で計算する（ある数の右肩に付記して、その累乗を示す数字）、各々命式中に幾点あるかを合計する。

その合計で、日主は何点、財帛は何点、官殺は何点と計算してゆきます。一局集中の人は、ある五行だけの点数しかない場合もあります。

尚、月令を得ているものを「当令」、月令を得ていないものを「不当令」と表現します。A子さんの命式で計算してみます。

●A子さん 1973年（昭和48年）4月9日 15：30
東京都生まれ（例1）

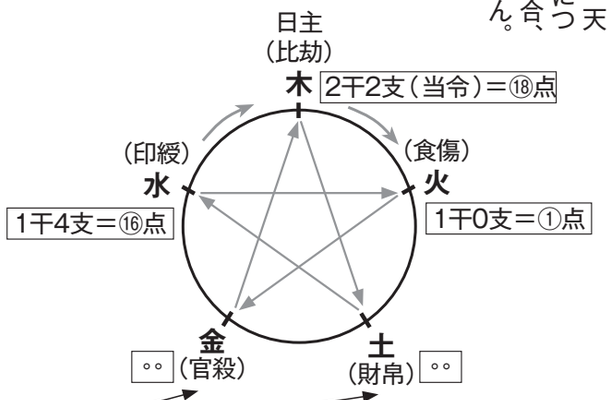
（この命の五行の配分は、五行の相生相剋図で解りやすく示すと下記の図になります）

時	日	月	年	
甲（木） 申	乙（木） 当令 亥	丙（火） 辰	癸（水） 丑	天干地支
劫財	日主	傷官	偏印	六親
金・水	水・木	土·木·水	土·水·金	根

（乙月木令）

*ただし、0支の場合は、天干のみを計上し、1干につき1点とします。その場合、当令、不当令を問いません。

（水）…1干4支（不当令）
　　$1\times2^4=1\times(2\times2\times2\times2)=16$点
（火）…1干0支＝1点
（例えば2干0支の場合は2点になります）
（木）…2干2支（当令）
　　$2\times3^2=2\times(3\times3)=18$点



官殺と財帛は、根はありますが、天干がないので0点とは表示されません（ただし、行運で天干が来ると1干2支＝④点が現れます）。

この命式は年と月、日と時で、二組の干合があります。そして生まれ月は春の月令が「木行」であるため、変化干合となります（丁壬干合は化木）。よって元の命式は、A→Bに変化した命式の意味となります。

注:実際の場合は、初めの命式に〈変化干合化木〉のコメントを加えて使用。化木は甲乙でなくて木行の塊りとなるため丁壬〈化木〉と示す

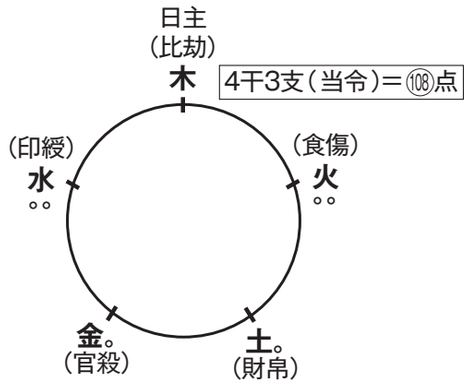
このB子さんの命式は、日主に一局集中ですが、行運で他の五行がめぐれば、食傷は四点、財帛は二点と点数は入ります。

右下の数値一覧表は王文澤の原本でも四干四支迄ですが、あえて五干五支迄の表を作成しました。B子さんのように四干同じ干の場合、大運と歳運のどちらかに同じ五行がめぐって来た場合、五干となるからです。

同様に地支も四支ある人が行運であと一支来た場合、五支となるからです。

●B子さんの点数

木…4干3支（当令）
$4\times3^3=4\times(3\times3\times3)=108$点



月令を得るということがいかにエネルギーがあるか、不当令と数値を比較してください。

●B子さん1947年（昭和22年）2月22日14：00 東京都生まれ（例3）

B子さんの命式

Ⓐ（初めの命式）

時	日	月	年	
丁未	壬申	壬寅	丁亥	天干地支
正財	日主	比肩	正財	六親
土·木·火	金・水	木・火	木・水	根

（変化干合化木）　（変化干合化木）

（甲木 月令）

寅・申の冲、二組がセットのため三支開く

亥・寅の合

Ⓐから Ⓑの命式に変化する

木の塊り　木の塊り

Ⓑ（変化した命式）

時	日	月	年	
乙未	甲申	甲寅	乙亥	天干地支
劫財	日主	比肩	劫財	六親
土·火·木	金・水	木・火	木・水	根

（変化干合）　（変化干合）

（甲木 月令）

●数値一覧表

	天干＼地支	0支	1支	2支	3支	4支	5支
当令	0干	0	0	0	0	0	0
	1干	1	3	9	27	81	243
	2干	2	6	18	54	162	486
	3干	3	9	27	81	243	729
	4干	4	12	36	108	324	972
	5干	5	15	45	135	405	1,215
不当令	0干	0	0	0	0	0	0
	1干	1	2	4	8	16	32
	2干	2	4	8	16	32	64
	3干	3	6	12	24	48	96
	4干	4	8	16	32	64	128
	5干	5	10	20	40	80	160

(7)「格局」を定める…命式の分類、パターンが解ります。

1 格局とは何か

──格局は分類の他に、人生の目的、基盤、その人物の主体を示す。
また、格局には「真の格局」と「仮の格局」がある─

さて、命式を作成し、命式を整理し、命式の点数計算が終わると、子平の特徴である「格局」を求めることが出来ます。

格局とは、命式を分類する概念（物事を本質的に捉える思考の形式）になります。この命式は「何格である」というのは、この人の人格は二重人格である、または、何々タイプである、というのに似ています。一つの命式を「何々格」と定めることによって、色々なことが解るのです。格局は単に分類するだけでなく、その命の人生の目的、基盤、主体を表します。格局を知ることによって人生の方針を定めることが可能であり、それがいつ頃であり、願望達成能力はどのくらいのものなのか、その目的達成の手段は何か、取り巻く環境はどうなのか（格局を取り巻く「用神」が、その目的達成手段となる）などが解ります。そういうわけで、格局を定めることは子平推命にとって、最も大切な要なのです。

そしてまた、格局が取れたら一人前、といわれるように、格局を判定するのにとても難しい命式もあります。どんな格局なのか、首をかしげるような、「格局」そのものが成立しない命もあります。

その場合は、「元命」─元々の命式─にめぐり来る大運や歳運がいかに作用を加えるか、によって判断してゆきます。一生ぼんやり生きていた人が、振り返れば、ある一時期だけ人が変わったように輝いた、活躍時代があったなどとあれば、その時期だけ「ある格局」が成立していたと判断出来ます。

ですから、初めから自分の格局が解れば、一生の内でいつ頃ブレイクするか予想して人生設計を立てられるのです。

「君子知命」とは、まさに君子たる者、自分の命を知って、自己の出処進退は自分で決める、という運命学の原点となるのです。

また、人は往々にして「世を忍ぶ仮の姿」といわれるように、今現在「仮の格局」で生きている場合が「真の格局」を得て、あるいは選んで生きていれば、一流の世界で成功する可能性があるのに、横道にそれたり、気づかずにチャンスを逸しているのです。やはり、「知命」は大切で、当人が真と仮のどちらの人生を選んでいるか、見極める必要があります。

真の格局…蔵干や月令が、格局の構成に含まれているもの。すなわち月令を得ている天干が、格局になっているもの。

仮の格局…月令を得た五行が天干になく、命式の中で一番点数の高い干を格局にしたもの。この場合、月令と同じ五行が行運でめぐる時、真の格局に変化することがある。

（『滴天髄』の「真仮論」より）

注：ただし、月令が命式にとって忌神でないことが前提。また、仮の格局でも発展成功する天干相互の干関係のよい命式もあります。

昔「女優」であった人、また「アナウンサー」であった人が一国の大臣となり、しかも並み居る閣僚を抑えて、その名をとどろかすなどは「仮の格局」から「真の格局」に移行した姿であると見ることが出来ます。

2 大きい二つの区分「外格」と「内格」
―外格の中にも区分があり、内格の中にも区分がある―

格局には、大きく分けて二つの区分があります。

① 外格（従）…武職
一匹狼的仕事人間、ブルーカラー的な専門職向きの武士タイプ。

② 内格（不従）…文職
環境や対人を上手に使う、ホワイトカラー的なバランス人間、公家タイプ。

外格は、命式の五行が一方の五行に偏るものをいいます。その命はその五行に従うため、「従」といいます。

内格は、命式の五行の偏りに対して、それを抑えるものや扶けるものが、他の天干地支にある場合をいいます。その命式が一つの五行だけに従わないため、「不従」といいます。したがって外格は「一局集中」を吉とし、内格は「バランス」を吉とします。

結果として、外格はその事柄―ある五行の能力―（外格は専門的才能に恵まれている）だけを生かして生きるタイプで、それ以外はあまり世間を上手に渡れない個性派となります。それに対して内格は、あまり一つの事柄のみに集中せず、広く世間に関心を向けて、人脈や環境を生かしながら要点を掴んで生きるタイプで、常識派となります。

◎女性はキャリアウーマン・独身タイプ

外格
砦、辺境の地を死守する武職（戦闘タイプ）

一匹狼的仕事人間、一芸に秀でる能力者。
バランスよく生きるのが下手。
夢と希望に野心を持ってチャレンジする、自己の才能だけが頼りの専門職タイプ。

スポーツ選手、芸術家、芸能人、作家、画家、建築家、冒険家、発明家、マニアックな分野の実業家、開業医やオリジナルな店などを開く自営業者、マスコミ関係者（特にフリーの）、修行僧的な宗教家、フリーの占術家など。

◎女性は良妻賢母・専業主婦タイプ

内格
中央政権の地を守る文職（安定と防衛タイプ）

環境や対人関係に恵まれて、和を保つ能力者。
バランスよく生きるのが上手。
家族や人脈を上手に使いこなす。
公的立場や家庭が頼りの常識人タイプ。

サラリーマン、ＯＬ、政治家を代表とする公務員全般、組織に属した研究員、教職者、大学病院勤務医、看護師、税理士、会計士、国選弁護士、大きな団体、組織の実業家、宗教団体を運営する宗教家、占い専門店に所属している占術家。

以上を解りやすく区分すると、大体右上の図のようになります（もちろん例外はたくさんあり、必ず次のように決定されるわけではありません）。

この後、手順はまだまだ続き、「外格」の何格か、又は「内格」の何格か、その格のテーマは何か、又、命式の判断には、格局以外に、「調候」と言う、季節が命式に与える作用を読む、判断手順もあり、<「格局」で吉でも、「調候」で凶>又<「調候」で吉でも「格局」で凶>の命式も現実にはあり、御説明したいことは、沢山残っていますが紙面が多くなりすぎました、後は「専門書」をお読み頂く事で、お許しを頂きます。

尚、最後に、少しは易しく楽しい物と、少しは為になるものをと、追加しました。

紙面がより多くなります事、意図を御理解下さいます様に。

「命式の判断」

甲から癸迄の十干の性情を知ることで、格局が不明の場合いでも、
命式の大まかな判断が出来ます。

A 組み立てた命式の「四柱」の中で、一番点数の多い「干」、又は月令を得ている「干」を見て下さい。格局によって、その干が、喜神になるか、忌神になるか、逆転する場合もありますが、判断の目安になります。一般的には同じ人間の「長所」と「短所」になります。

B 自己分析をして、長所の部分が多ければ、その「干」は喜神であり、短所の部分が多ければ、忌神となります。（大運、歳運の流れで時代により変化が有りますので・・今年の私はいつもと違う性格になりました・・と言う判断はここではしないで下さい）その場合、行運で同じ「干」や干と五行が同じ「根」（十二支）が廻れば、喜神なら運気上昇し、吉運となり、忌神なら凶意の多い年と判断出来ます。

C その他、「四柱」に色々な五行の「干」が同等な力である場合、日主（日干）を優先に見て、年、月の「干」は表面の顔（又は若い時代の傾向）、日、時の「干」は内面の顔（又は晩年期の傾向）と判断し、あまり人生に大きな変動の波をかぶらない、平凡でも安泰な、バランスのとれた世渡り上手、と見ることが出来ます。

D 尚、「四柱」の中で一つの五行が、特に点数が高い場合、人生はやや波乱が多く、世に出て出世や何者かに成ることが有りますが、どんでんも多く、個性的なタイプと見ることが出来ます。

注：本来「子平」は格局が取れなければ命式の正しい判断は出来ません。これはあくまでも目安です。又、命式中に、「干合」「合、冲」が有る場合は命式そのものが変わる為、命式の整理をしてからの判断となります。

甲から癸迄十干の性情で見る

❶ 甲が日主、または体神の人

甲は天に向かって伸びてゆく大樹、五行の中で木行、植物は唯一の生物です。現在進行形の生命力を持っています。心身共に向上心、発展力があり、「少年よ大志を抱け」の如く、自分の人生の目的を具体的に求めてゆくタイプとなります。決して社会の底辺に甘んじることなく、よりよい環境をつくり出し、努力して天下に名を成す立場を得られる、または得ようとする、アメリカン・ドリーム型（現在は死語であるかも）です。反面、大木は大地に根を張れば見事で立派な人物となりますが、ゆるがない頑固さ、根性はあっても、融通性がないなど、プライド高く唯我独尊になりやすく、対人関係で頭を下げられない、妥協しない欠点があります。

自分と同調する尊敬出来る人物がそばにいれば、志を同じくする同族として共に手を組んで発展していきますが、対立するものには目障りな存在になってしまうでしょう。一般的には周囲から頼り甲斐のある人物として期待されますので、その分、自身の人徳を養う必要があります。

強いばかりで世間を見なければ、お山の上の一本杉のように孤立して、人離れになります。甲の人は、特に天に恥じない、世のため、人のための心を持つことが大切です。

甲　きのえ　コウ　木行　陽干

・形象
樹木　大木　材木
しっかりした幹を持つ木

○甲は、二本で林となり、三本で森となり、甲尊、甲木参天（天に参る、偉くなる意）といわれ多いほど貴いとされる。乙があるとエネルギーを取られる作用。

❷ 乙が日主、または体神の人

乙は甲と同様、五物の中の生命ある植物、花々であり、草、蔓、蔦であるため、甲にない柔軟性を持っています。

柔よく剛を制す、といわれるように、その柔らかさ、従順さで強いものを我が身に取り込む頭のよさと、機を見るに敏の臨機応変の才能があり、その環境に応じてしっかりと生きてゆくことが出来ます。また、その花の美しさは万人に愛され、踏まれても立ち上がる雑草の強さもあり、対人関係においても忍耐と協調性で上手に困難を切り抜けてゆきます。

反面、乙女の如く優しくロマンチストの乙も、強いものや優位の対象物に取りついて、自身の安全、発展を本能的に保つ特性があるため、おとなしく謙虚に見えて利害関係には敏感で、損得を計算する傾向があります。理財観念が発達しているため、ちゃっかりしていると思われたりもします。発展、上昇を目標にする甲と違い、上下より左右に目を配り、風向きのよいほうになびく弱い草木ゆえのしたたかさがあります。花の種が風に乗ってどこに着地するかは、花にとって生死に関わるのと同様、乙の人はおかれた環境によって自身の弱さゆえの迷いや依頼心が命とりになるため、いち早く自己の安全な場を求めて移動します。乙の人が吉凶の流れに敏感なのは、自然界の法則にかなっているといえるでしょう。いずれにしても魅力的で美しい雰囲気と、たおやかな色気と可愛さは、女性象意の代表で男命も女命も共に人に嫌われない徳となります。

乙　きのと　オツ　木行　陰干

・形象
草木　花　蔦　蔓
芝　木の葉　雑草

○乙は、甲と異なり、たくさんあっても同種のものが重なり合って上に伸びない「伏吟雑草」の作用となり、凶兆。甲と組めば自分の力以上の変化と発展が可能となる。

❸ 丙が日主、または体神の人

太陽である丙は、陽干の最強です。猛烈にして尊貴、といわれるように偉くて立派です。

エジプトの太陽神ラーの如く地上の生きるもの総てに力を与え、その努力を惜しまないボランティア精神があります。自分に寄りついて来る人たちに親切です。明朗で元気、インパクトが強く、スター性があり、行動力があります。

当然どこにいても中心人物となる存在ですが、時として真夏の太陽のように熱過ぎて、人に敬遠される場合もあります。生物にとって太陽は最も大切な存在ですが、他に与える力や影響力が強いだけに、剋する立場になると、日射病や熱中症の如く、相手をバタバタ倒してゆきます。

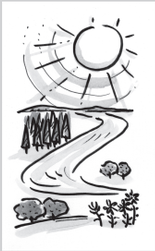
夏生まれの丙の人は、自分がよかれと思う行動が周囲の迷惑となる場合を考慮に入れて、テンションを下げることも必要です。

反面、太陽に地支の根の補充がない場合、すぐ日が陰ってしまう、残念な期待はずれの存在となり、照っては曇るの繰り返しで、その時々に人々を振り回し、徒花（あだばな）で終わる人生となります。

皆に号令をかけて、自分はいつの間にかいなくなる、口だけ達者の竜頭蛇尾の気分屋さんになる傾向です。気分の浮き沈みが激しく、「ついてゆけない」といわれないように注意が必要です。

丙　ひのえ　ヘイ　火行　陽干

・形象
太陽　光（自然光）
陽光　輝き



○丙は、命式中に一つあるのが尊く、「天無両日」（天に太陽は二つ昇らない）といわれ、多くあるのは常人では個性が強過ぎて周囲から浮く存在となる。丙は他の干のためにあることで使命を果たせる。

❹ 丁が日主、または体神の人

丁は、人間がつくり出した地上の火です。丙が天上界の光である如く、丁は地上界の叡智の光で、内に秘めた実力者となります。

丁火はたくさんの松明で人々を、または天下を照らすこともあれば、一本のローソクの灯りでもあり、神仏の前に座する修行者のように、寂しさや孤独に耐える哲学者的な精神力があります。一般的には、学問好きで頭がよく、礼儀正しくクールですが、内面の炎は点火する原料や素材があれば、一気に燃え上がることも出来、改革の星ともいわれ、情熱的に激変する場合があります。

日頃は穏やかで慎重な人が、ある時をキッカケに世の中に打って出て、あっという間に有名人になる可能性もあります。

また、冬の丁は寒さを暖める炉の火となったり、水をお湯にする力があり、近くの人々のために愛情ある大切な働きもします。

反面、人工の火は、やはり自然界の太陽の如くダイナミックではありません。昼間のランプは何の役にも立たないのと同様、相手次第では弱く無気力な存在となります。ローソクの炎は燃え尽きる迄たった一人で頑張るしかないとばかり、頑なに孤立を守ったり、宿命や人生を思い悩み、「考える人」や「策士」になる傾向があります。

頭がよいのですから、学者になったり作家になったりと、智と想念を発展的に使いましょう。自分を生かす材料を見つけることによって、最高に燃え上がることも出来るのです。

丁　ひのと　テイ　火行　陰干

・形象
灯火　火災　人工の火
ローソク
イルミネーション

○丁は、丁が来てもあまり協力せず、丙の太陽のそばでは無力な火となり、仲間であってもライバルとなる。甲乙戊己と組んで発展がある。

❺ 戊が日主、または体神の人

戊は大地であり、岩石であり、動かざること山の如し、のように頑固者で融通が利きません。しかし、万物を育て、守る土の使命から情のある人となります。特に男性は異性運や財運がよく、腕を広げて包み込み、自身に総てを染み込ませる徳や力があります。

真面目で庶民的で気取りがなく、無理をしないおおらかさがあり、優しい母なる大地でもあり、険しい父なる山岳でもあり、頼りになる存在感ある人物です。

人の面倒を見たり、相談に乗ったり、保守的な親分肌で、一度親しくなると永くおつき合いが続くタイプです。

ただ、頼られれば何でも受け入れる体質のため、悪い人間でも、事柄でも引き受けてしまいます。色々な成分を含む土の中には、異物や毒物も入っているかもしれません。物事の一面だけを見て、土中を掘ってゆくと、あっと驚くようなものが発見されるかもしれません。土行の人は、表面ほど単純ではないといえるでしょう。

また、土も環境により、水分がなければ万物を育てない、生じない乾燥した地質もあります。人を寄せつけない断崖絶壁や、樹一本ない禿山が連なり孤立している如く、手に負えない偏屈者もいます。一部でも平らな地面になれるよう、自身を切り崩して開発してくれる人脈を呼び込みましょう。

戊　つちのえ　ボ　土行　陽干

・形象
山　堤防の土　岩石
大地の　固い土　炉壺
などの容器

○戊は、同質の戊と組んでも逆作用で利はなく、己も役に立たない、むしろ丁や乙や癸などの他干と組むと、相生効果の役割と発展がある。

❻ 己が日主、または体神の人

己は水分を含んだ柔らかい土地であり、養分を含んだ壌土です。戊土同様、万物を育てる役目を持つため、人に親切で世話苦労の人でもあります。女性でいえばよき妻、よき母タイプとなります。

また、湿土は元々諸々のものを含んでいますが、何事も吸収する力があり、頭のよい勉強家です。そのうえ自身に取り込んだものを発酵させ、変容させる臨機応変の処理能力があり、フットワークがよいとはいえない戊土と比べて上手に世の中を渡ってゆけます。

才能多く、穏やかで情もあり、偉ぶらず、謙虚でと、文句のつけようもない満点タイプですが、やはり柔らかい土中には何でも入っています。一見した表面では解らない複雑怪奇な泥沼の如く、その内面は不透明で、決して単純ではない戊土以上の奥深さがあります。善悪両面を理解し、使いこなすタイプでもあります。反面、低地の土は庶民的であり、柔らかさは崩れやすさでもあり、上位の者や強いものに圧力をかけられると妥協したり、流されたり、弱さが見えてきます。

特に愛情関係では、吸収したものに利用されて、最後は自己の地盤が崩されてしまう危険もありますので、上手の手から水が洩れないよう、きれいな田園の大地を農薬で汚染されないよう、強い心を持つことを心がけましょう。尚、逆もまた真なりで、情の深さが人に迷惑をかけている場合も注意が必要です。

己　つちのとキ　土行　陰干

・形象
湿土　壌土　混土　仮
炉　田畑　泥　砂　沼
地　大地の低地　柔ら
かい土地

○己は、己の力にならず、戊がそばにあれば強化され大発展となる。丁火があれば火を守る炉となり、使命を果たせ、壬水と組めば水を汚す悪役となる。

❼ 庚が日主、または体神の人

庚は鋼鉄であり、その頑固一徹の堅さが特徴です。正義感が強く、白黒をはっきりさせたいタイプとなります。適当なお愛想やお上手はいえません。世渡り下手の妥協知らずで、強気で直進しますので、とかく対立や論争を生じます。行動力ある負けず嫌いのファイターですが、さっぱりした性格で複雑な駆け引きが出来ない分、単純でもあります。

また、強いものや不正なものには徹底抗戦し、容赦はしませんが、弱いものや困っている人、またお世話になった人には任侠・義侠心で助ける義理堅さと情があり、男の中の男的タイプです。

根性を必要とするスポーツ選手や、正義の人であるべき司法などの職業を選ぶ人が多いのも特徴の現れでしょう。

反面、はっきりした性格だけに人間の心理の裏表を読むのは苦手で、世の中の情状酌量を理解するためには、人生勉強と学問や他の修業などで鍛えられることが必要であり、弱いものが必ず善なるものではないので、騙されないように注意も必要になります。

また、自身の言動がストレートな強さゆえに、周りを傷つけていないかどうか、自身の正義が果たして万人の正義かどうか、鉄拳を振りおろす前に自己チェックも必要です。

純粋で単純であるだけに、早くから自己を研鑽すれば、天下の名刀にも変化出来ます。粗暴な粗金（あらかね）でいないことが命運の別れ道となります。

庚　かのえ　コウ　金行　陽干

・形象
鋼鉄　刀剣　合金　鉱石
鉄　金塊　レール

○庚に庚が来ると、刃物と刃物がぶつかる「戦格」となって好戦的で災いを招き、庚辛が並ぶと上品と下品の入り交じった矛盾のあるキャラクターとなる。

❽ 辛が日主、または体神の人

辛は珠玉であり、地球上の価値ある極小金属レアメタルであり、美しく貴いものとされる如く、その特性もプライド高く、高級志向の上品でデリケートな個性を持ちます。

常に新しいもの、美しいもの、価値あるものに心ひかれ、自己の満足のゆく環境をつくり出し、心身を豊かに優雅に保つことが理想となります。

ただし、美しいものは強さに欠け、デリケートさは傷つきやすい打たれ弱さとなり、輝く才能がありながら、なかなか世の中に打って出ることが出来ません。希望の達成がならない、苦労が多い人生となります。

いわゆる、知る人ぞ知る、キラリと光る一粒ダイヤの如く、貴重品ながら万人向きではないのです。

また、独自の価値観の高さから、体裁や見栄を張るところもあり、庶民的な親しみやすさに欠けるところもあります。本質は涙もろく、繊細で金行の儀礼の人ですが、誤解されて世間を狭くする、孤独の人でもあります。反面、宝石のような才能で、芸術、芸能、文化など自己の資質を生かした分野にチャンスを掴み、磨けば光る玉となり、価値ある人材になることも出来ます。

尚、打たれ弱いといいながらも、辛はやはり金属です。頑固さや鋭さがあり、あまり打たれ過ぎると反逆し、金属の切れ味で相手を傷つける場合があります。一旦キレると刃物の凶器となりかねません。言葉、動作の厳しさ、荒々しさに注意しましょう。

辛　かのと　シン　金行　陰干

・形象
宝石（ダイヤなど）　珠玉
（真珠など）　金・銀・プラ
チナ　レアメタル　小刀
カミソリの刃　はさみ

○辛は、命中に一つあるのが貴く、たくさん並ぶとジャミダイヤ。貧弱さに変化、庚に逢えば砕かれて価値を失う。

❾ 壬が日主、または体神の人

壬は海であり、大河であり、ロマンチックな湖でもあります。流れる水は自由を好み、マイペースです。ある時は夕陽に輝く湖面の優雅な美しさ、またある時は激流の如く荒々しく、ダイナミックであり剛柔兼ね備えた知性と勇気の人です。

また、流れる水はどこにでも行き、総てを巻き込むおおらかさがあり、細かいことを気にしない粋な遊び人であり、親切に人のお世話をするタイプでもあります。

尚、水は人体にとってエネルギーとホルモンの源泉となるため、異性縁が多くなる傾向があり、時としてお酒や恋に災いを招く人ともなります。天下御免の自由人も、自分勝手で身を滅ぼさないよう用心が必要です。

しかし、壬は、度胸と知力があり、少々の失敗などすぐ取り返す大物で、我が道を行く人生は常に前途洋々でくよくよせず、水に流して悠然とした個性は魅力的で、どこにいても目立つ人気者となります。

反面、水は常に一定に安定した存在ではなく、変化と流動性があるため、過ぎたれば大洪水となって天下の平安を乱します。公的立場にある者、責任を持つ立場にある者は、心して自己を律する必要があります。自分勝手も他に迷惑をかけないことが、大切な条件となるのです。

壬

みずのえ
ジン
水行
陽干

・形象
海　河川　湖
流水　滝　津波

○壬は、壬・癸と組むと河川に降雨の増水となり「冲天奔地」の洪水の災いを生じる。金と組み、特に辛があれば十干中一番の眉目秀麗となり幸運が舞い込む。

❿ 癸が日主、または体神の人

癸は細かい水滴であり、雨であり、密雲であり、霧であり、その個性も簡単には掴めない複雑なものになります。「杳（よう）として知れず」とは、まさに癸を言い表しています。

多くの癸は優しく情があり、勤勉で繊細で、万物を潤す慈雨といわれるだけに愛する者に与える力、尽くす力は絶大で、人の面倒を見、苦労を耐える努力家です。

また、天から降る雨や霧は、天上の機密を地上に降ろすシャーマンであり、神託を告げる巫女でもあり、常人とは異なる能力・感性を持っています。霊的な作用を受ける、または使うタイプが多いのも癸の特徴です。そのためか、十干の中で表面のイメージと、実際の内面の落差が一番大きい人物となります。

表から読み取れない、やや非現実的な精神世界は、どこにでも瞬時につながって、天国の階段にもなれば、地獄のフタにも通じます。自己の想念を正しく美しく持てば、神の御心に届くことが出来ますが、暗く冷たい氷の心を持てば、どこまでも地底の闇に落ち込んでしまいます。

念の世界を左右する力を持つ水分は、自らの心を明るく前向きに保ち、現実的に生きることで開運します。自己の世界に閉じこもらずに、もう一つの内なる自身のマイナス思考に注意しましょう。

癸

みずのと
キ
水行
陰干

・形象
雨　露　霞　霧　霜
雲（水気を含んだ雲）

○壬と合流すれば細かい雨も大胆不敵に変化。水が多いと、いわゆる水商売に向くタイプともなる。甲乙戊と組めば恵みの雨となって使命を果たし、成功や発展がある。

「原文の秘伝の見方」

最後に、子平推命の原文の一部分ですが、「透派子平大法心得」-王文澤著―より古典の示す秘伝の見かたを公開し、それに解釈を加えてご紹介しておきます。

性情　―性格と個性―

比劫均匀而穏健（しこうしておんけん）、過強則乖僻（かいへき）、不足則慌張（こうちょう）

食傷均匀而温厚（おんこう）、過強則多事、不足則孤陋（ころう）

財帛均匀而慷慨（こうがい）、過強則耽楽（たんらく）、不足則吝嗇（りんしょく）

官殺均匀而謙虚（けんきょ）、過強則懦弱（だじゃく）、不足則傲慢（ごうまん）

印綬均匀而精明（せいめい）、過強則依頼（いらい）、不足則笨拙（ほんせつ）

◎比劫

比劫均匀而穏健

―比肩、劫財のバランスが取れた命は穏健であります―

日主の安定は、他の影響に左右されない自信であり、自己確立であり、自ずと心にゆとりが出ます。また、地支が通根して理想的な孟支（五〇％の出力）であれば、容姿も美しく、体格（スタイル）もよいとされます。

過強則乖僻

―比肩、劫財が強過ぎると、すなわち人格的にも偏りがあります。個性が強く、他との協調性がありません―

自己が強過ぎると、世間や他人と妥協出来ず、不平不満が高じて偏屈となり、人に背き離れるひねくれ者となります。

不足則慌張

―比劫が不足すれば、慌て者で大袈裟な人格となります―

日主の弱い命は、自己に自信がなく不安定となり、常に対外的なプレッシャーを受けやすく、ビクビクとして落ち着いた心境になれず、些細なことに動揺するようになります。

注:尚、これらの性情は、従格（外格）の場合に一局集中で吉となる命であり、バランスを必要としないため、他の不足、また、従神の過強があっても、それぞれの六親のマイナスの象意は出ません。命式にとっての「喜」「忌」が何であるかによって判断されます。また、命式にとって忌神であるものが弱い場合、弱い忌神を制することが出来れば（従旺格で忌神の財が弱ければ、その財を抑え止めるために逆に財を使える―収益も上がることになります）、忌神の六親を使いこなせて吉となり、凶兆はほとんど出ません。

逆に命式にとって喜神であるものが弱い場合のほうが、必要な喜神が欠けることのマイナス作用となり、その喜神に当る六親の凶兆が出ます。比肩、劫財が弱い場合、天干のみで地支が0（ゼロ）支であったりなど、日主が弱い従旺格は（他干が日主以上に弱い場合、従旺格が成立）ほとんど従旺格の象意が出ず、行動力のない、あっても具体性のない状況となります。

まとめて申し上げれば、内格も外格も共通して忌神が強い場合は、悪い性情が強く出て、運を下降させ、忌神が弱い場合は、欠点である悪い性情があまり出ず、本人の努力次第で凶兆を免れることが出来ます。

また、同様に喜神が強い場合は、よい性情がはっきり現れて運を開き、喜神が弱い場合は逆に、そのよさを発揮出来ず、来るべき幸運が来ないということになるのです。

◎食傷

食傷均匀而温厚

―食神、傷官がほどよくバランスが取れていれば、温かい情のある人柄となります―

食傷は日主のエネルギーを洩らすところです。感情の発露、愛情表現の場であり、衣食を愛し、趣味を好み、他者に親切な奉仕の精神が特徴となり、美しい容姿と共に交際力で人気を得ます。

過強則多事

―食神、傷官が強過ぎることすなわち、あちこちに首を突っ込み、人に干渉する、おせっかいな人柄となります―

食傷はアピール力のため、動き過ぎ、多くを求め過ぎ、日主のエネルギーを無駄に洩らし、体力も消耗します。また、自己の好みに集中し、常識的な社会生活から逸脱した言動で、世間に受け入れられない損失を生じることもあります。

不足則孤陋

―食神、傷官が不足すれば、他を隔絶し人に全く無関心な心の狭い人柄となります―

食傷のアピール力、交際力の欠如による人間嫌い、新しい情報を受け入れず自己の殻に閉じこもる、頑なな暗い覇気のない性格となり、社会に打って出て活躍することに縁のないことになります。

また、もう一つを加えさせていただくと、度々申し上げてはいることですが、人は誰でも「大運」と「年運（歳運）」がめぐってきます。その時命式にない欠けの部分がめぐれば、「孤陋」が急にやる気を出し、社交的になって行**動を起こ**し、一気に運を開くチャンスを掴むことがあります。苦労した分だけ落差の反動は大きく、むしろ生まれつき命式のよい人間よりブレイクする傾向があります。

元々命式がよい（吉神大露（たいろ）…吉の神様が多過ぎるの意）とあまり日頃から努力をしなくても幸運のため、よい大運、歳運がめぐってもぼんやり過ごし、またはチャンスを選り好みして大きい運を逃しますが、悪い命式の人は日頃の苦労や努力の積み重ねの分だけめぐり来る吉兆に敏感です。こちらの反応の強さに応じて世間は返してくれます。また、そういう時期には予期せぬ天運も一緒にやってきます。

欠けのある人は、常にめぐり来るチャンスに備えて用意をすること。そして諦めないことです。いずれにしてもチャンス到来には感謝の心と一生懸命さが必要です。

◎財帛

財帛均匀而慷慨

―正財、偏財がバランスよい命は、不正を嘆く親分肌の意気に感じる侠気のある人柄となります―

財帛は現実を上手に処理する世渡り名人。指導力があり、男性は粋な通人、女性は姐御肌となり、世間に進出して人の上に立つ人材となります。

過強則耽楽

―正財、偏財が強過ぎればすなわち、酒色にふける遊び人となります（ものぐさで楽して生きたい価値観）―

財帛は文字通り財を示し（仕事）、男性にとっては異性を示します。バランスが崩れると非現実的な楽天主義者となることで、経済観念を失い、対人の節操もなくなります。

不足則吝嗇

―正財、偏財が不足すれば、計算高くケチな人柄になります―

財帛は仕事、対人を使いこなすところであり、欠けることによって物事に横着になり、対人や仕事に労を惜しみ、経費を惜しみ、他者へのサービス精神がなくなります。損得で行動する傾向に変化し、結果的に人の上に立てなくなります。

◎官殺

官殺均匀而謙虚

―正官、偏官がバランスを保てば正直で謙虚な人柄となります―

官殺は自己を制する唯一の場であり、公的立場、社会性を示す象意のため、バランスがよければ国家の要人として活躍出来るスケールとなります。謙虚な人柄であればこそ、汚職をしない公僕となれるのです。

過強則懦弱

―正官、偏官が強過ぎれば、臆病な怠け者となります―

官殺は、自己に対する制、すなわち剋となるため、程度を過ぎれば外部からの圧力であり、自己を制し過ぎて何も出来ない状況になります。おどおどと意気地がなくいじめに遭う傾向となります。また、剋に対する反発から反抗的にもなります。

不足則傲慢

―正官、偏官が不足すれば、人を侮り礼節を欠く、傲慢で偉そうな人柄となります―

官殺は、社会的対人面を見る場ですから、不足となれば社会性が欠け、総てに反省がないため、世間一般の顰蹙を買うことになります。また、社会や仕事に忍耐せず、職を転々とする結果を招きます。

◎印綬

印綬均匀而精明

―印綬（正印）偏印のバランスがよければ、何事にも精通した聡明な人となります―

印綬は自己を生じる自己充実の場で頭脳を示しますので、バランスがよければ学術的な才能の持ち主となり、文字の示す通り、地位や名誉を得ることが出来ます。また、生じる母を示すことから生母のよさ、家柄のよさを表し、お嬢様、お坊ちゃまともなります。

過強則依頼

―正印、偏印が強過ぎれば、すなわち人頼みの依頼心の強い人柄になります―

印綬は頭のよさを示しますので、悪くなるとその頭脳力は悪知恵となり、要領よく立ち回って自身が動かない狡さが出ます。何事も人頼みで世間や親に寄生するヒモ的傾向となります。

不足則笨拙

―印綬が不足すれば頭が悪い、動作がのろく不器用である、とされます―

本来、頭脳明晰を示す印綬が不足することによって、いわゆる愚鈍といわれる気の利かない要領の悪さや、常に人の顔色をうかがっているような雰囲気を持ちます。

尚、拙著「子平推命」には、このほかにも沢山の、原典からの秘伝をご紹介しております。上記のテキストは、拙著「完全独習版 子平推命」(A5判612頁) – 説話社出版ーより一部抜粋、加筆、再編したものです。